

(3) 長谷のかめやき－長谷焼調査の覚書－

柴田 洋孝

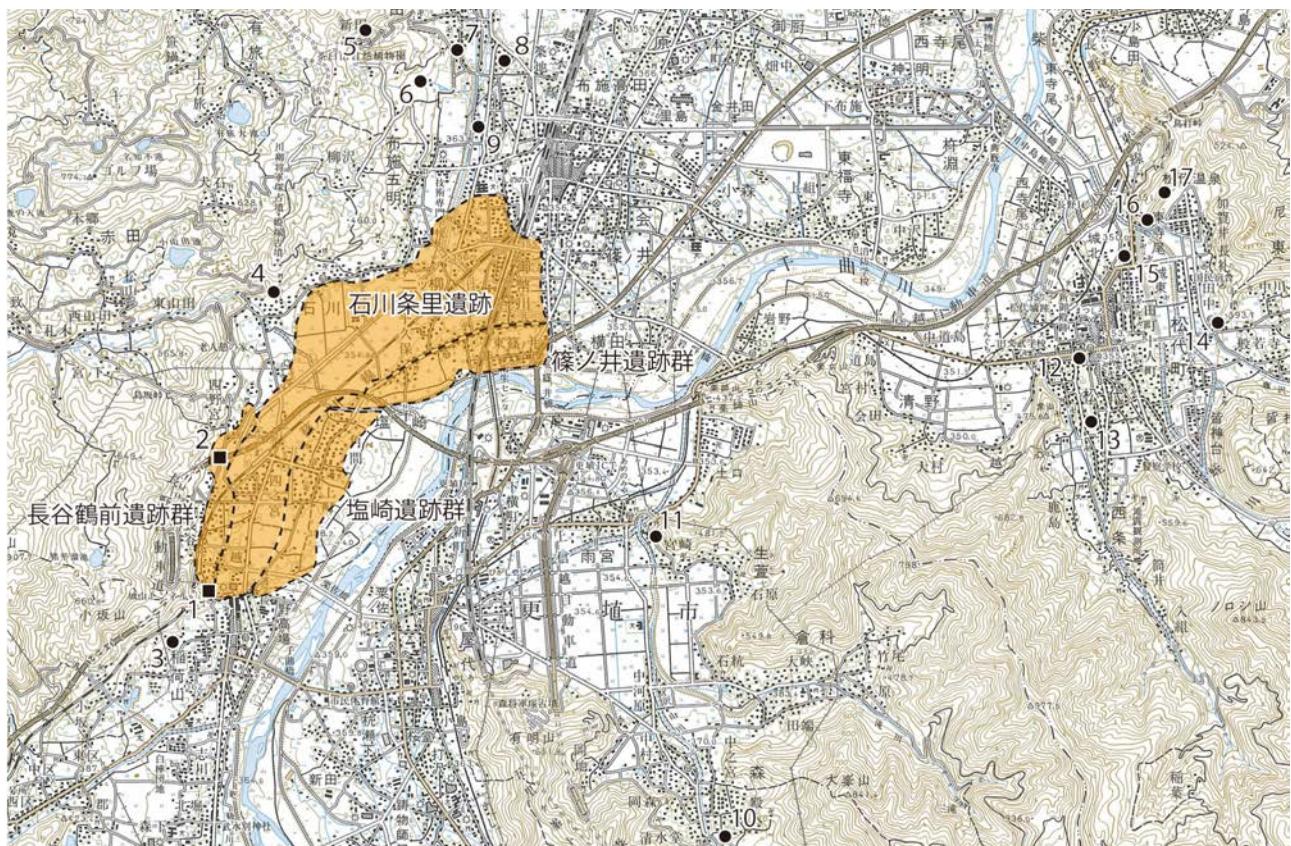
1 はじめに

長谷鶴前遺跡群は、長野市篠ノ井長谷に所在しており、2017・2018年度に一般国道（坂城更埴バイパス）改築工事に伴って発掘調査が行われた。1～3区の調査区において、平安時代の水田跡、室町～戦国時代の居館に伴う堀跡や道路跡、明治時代の焼物を製作した工房跡など、非常に多岐にわたる時代の遺構を検出した（第1図）。中でも、明治時代の長谷地区で焼かれた「長谷焼」に関する遺物は、本発掘調査における遺物出土量の大半を占め、地方における近代産業の一端が垣間見える貴重な資料であることが、発掘および整理作業によって判明した。

本稿では、発掘調査の状況を振り返るとともに、確認した長谷地区に営まれた長谷焼という近代産業の痕跡から、近代における埋蔵文化財の意義についても考えてみる。



第1図 長谷鶴前遺跡群の調査区（空撮）



第2図 長谷鶴前遺跡群の位置と周辺古窯

1. 長谷鶴前遺跡群・長谷窯（本調査地点） 2. 鶴前遺跡 3. 桑原窯 4. 石川窯 5. 岡田新田窯 6. 岡田払沢窯
7. 岡田南町窯 8. 岡田大門窯 9. 五明窯 10. 森窯 11. 雨宮窯 12. 原製陶所 13. 代官町窯 14. 天王山窯 15. 荒神町窯 16. 寺尾山根窯 17. 寺尾嘉平治窯・寺尾名雲窯

2 長谷鶴前遺跡群の調査と工房跡の発見

本遺跡群は、1988年に中部電力の送電用鉄塔建設に伴って長野市埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、1988・1990年には長野自動車道の建設工事に伴って長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われている（第2図）。この時の調査は、いずれも「鶴前遺跡」の名称で報告されており、本調査地点からは直線距離で北へ約1.3km離れている。確認された遺構は、縄文時代から平安時代の竪穴建物跡や中世の掘立柱建物跡などであり、遺跡群における包蔵年代も同様のものとなっている¹⁾。

今回の調査地点は、前述の調査地点から離れた未調査の場所であり、山際という地形、包蔵範囲の縁辺である点などからも遺構の有無は未知数であった。そのため、対象範囲内のトレンチ調査を行い、状況を把握する必要があった。掘削の結果、3区のトレンチにおいて、近世～近代とみられる焼物や土製品が、地表直下からまとめて出土した。このことから、未確認であった遺跡の状況を把握するためには、平面的な調査が必要であると判断した。

表土の掘削を進めて遺構の確認を進めたが、全体的に不明瞭であったため、サブトレンチを設定して土層を確認し、セクションベルトを残した状態で掘り下げを進めるなど、状況の把握に努めた。掘削の結果、中央に穴が開けられた方形の巨石が二つ並んだ状態で見つかり、この石を検出するまでに掘り下げた土の中には、大量の焼物の他に、用途不明の土製品が多く含まれていた。出土資料および現地の状況について、元愛知県陶磁美術館



第3図 重機掘削で出土した油壺

副館長の仲野泰裕氏に見ていただいたところ、土製品の多くは窯で焼成する際の道具であり、穴が開けられた巨石は轆轤を据えるための台石であることが判明した。台石は出土状況から、投棄されたものではなく据えられたままの状態であり、本調査区内に工房跡（作業場）があったことを確認した（第4図）。また、工房跡の基礎の痕跡とみられる石列も確認した。このことから、調査区の近くには焼物を焼いた窯も存在していたと考えられたが、窯そのものに関連する遺構などは調査区内で発見することはできなかった。また、土地所有者の許可を得て、窯があったと想定した山の斜面地などの踏査も行ったが、確認することはできなかった。

3 長谷焼に関する記録と調査状況の照合

長野市にとどまらず、県内各地には江戸時代から続いた地方窯が30基以上存在しており、研究が行われている。特に、北信地方は江戸時代後期に開業した「松代焼」²⁾が有名であるが、「長谷焼」に関しては資料の少なさからか、塩崎村史に記載があるのみで、地方窯の研究に取り上げられることはほとんどなかったようである。一方、松代焼



第4図 白色の粘土で固定されていた轆轤台石



第5図 焼物と窯道具が廃棄された穴

の研究を行った陶芸家の唐木田又三氏は、廃業した各窯元に赴いて現地の状況を調査し、所蔵品や窯元の風景などをその著書に収めている。そのなかには長谷窯に関する記載もあり、「地主の企業」として紹介している³⁾。

長谷窯の創業者は塩崎村（現長野市塩崎地区）の宮崎清右衛門〈1826（文政9）年～1893（明治26）年〉である。共同出資者である更級郡赤田村（現長野市信更地区）の小林彦八郎とともに、1867（慶応3）年8月に、宮崎清右衛門の敷地内に開業している。1875（明治8）年には清右衛門一人の所有となり、長男である七重〈1848（嘉永元）年～1924（大正13）年〉が跡を継ぐが、七重が目を悪くし、妻のふさが死去した1896（明治29）年頃に窯を閉じている。なお、清右衛門は職人を多治見から呼んで製品を作らせ⁴⁾、自らは作ることはなかったが、息子の七重は仕事の手伝いを行うことで仕事を覚えていったのだという。なお、窯の廃業後は、土地を宅地や農地へと転用している⁵⁾。

窯と工房は宮崎家の南側の敷地に築かれ、窯は山の斜面を利用した東西方向に延びる五連房の登窯であったとされる。間口は二間五尺五寸（約5.3m）との記録がある。閉窯後も窯は壊されず、明治の末頃までは残っていたという。一方、工房は窯の「北側」に建てられていたようで、間口9間（約16.3m）、奥行2間3尺（約4.5m）を測り、職人とその家族が住めるようになっていた⁶⁾。窯焚きは年に2回で、製造していた品物は大小の甕を主体として、擂鉢・紅鉢・片口鉢・徳利・土瓶などの日用雑器であったとの記録があり、旧役場の文書には製造数と売上代金の記録も残っている。生産数が増加している状況から、経営が順調であったことがうかがえる（第1表）⁷⁾。

焼物の原料となる土については、布施五明村（現長野市篠ノ井柳沢周辺）と桑原村（現千曲市稻荷山桑原周辺）の白土を用いていたようだが、岡田や小市の土を使ったとの言い伝えもある。土の配分などについての詳細は不明であるが、轆轤による成形後は天日で乾燥させ、1日かけて素焼きを

年	製造数	売上代金	利益
1877（明治10）	980	—	—
1878（明治11）	880	75円	—
1879（明治12）	1,190	—	—
1881（明治14）	1,031（1,061）	125円	—
1883（明治16）	1,150	230円	—
1889（明治22）	7,620	320円	40円
1892（明治25）	8,400	293円	—

第1表 長谷窯の生産数の推移と売上

行い、施釉後に約2日間の本焼きをしていたとされる。燃料には松薪が使用されていたようだが、仕入先などの詳細は分かっていない。

なお、塩崎村史の補記には、長谷窯へ岡田窯の米山通太郎氏らが手伝いに行っていたとの聞き取り記録が収められている⁸⁾。岡田大門窯は、もともと松代横町窯から岡田の地に移り住んだ米山直治氏が、1873（明治6）年頃に操業を開始した窯であり、長谷の閉窯した後の1926（大正15）年頃まで続いているとされる。岡田大門窯の職人、および直治氏の長男である通太郎氏が長谷に手伝いを行っていた時期は、長谷窯の晩年頃であるとみられ、岡田焼を通じて長谷焼も松代焼との接点があったと考えられる。

発掘調査の出土品から実際の売上などに関して考証することは難しいが、確認できた工房跡と窯跡の関連については記録との照合が可能である。工房跡に関しては、前述のように間口9間（約16.3m）、奥行2間3尺（約4.5m）とあるが、間口を東西または南北にとるかで大きく変わる。

長谷と同様に、轆轤台石が据えられた状態で見つかっている石川県加賀市松山にある松山窯跡は、東西方向に並んでいる轆轤台石と同じ方向に建物の間口がとられている。この点からすると、轆轤は工房の間口、ないしは長軸方向の壁に沿って据えられていたものと理解できる。

長谷の轆轤台石の出土状況からすると、工房跡の間口は轆轤台石と同じ東西方向にとられていたと考えられる。また、轆轤台石が壁に沿っていたと仮定した場合、北壁に沿っていると建物跡は山際に近い位置になり、窮屈な印象を受ける。一方、南壁に轆轤台石が沿っていた場合は、山際まで余裕がある。記録に残る建物範囲を網掛けで示すと、

ちょうど石で囲まれた範囲にも収まるため、この辺りが工房跡であったとみて問題ないと考えられる（第6図）。

次は窯の位置である。窯跡は踏査をしても状況が不明であったため、全くの推定となる。記録では、①山の斜面を利用した東西方向の登窯、②工房の南側にあった、という2点のみである。①からすると、東西方向の斜面を利用するということは、山の裾は南北方向に伸びている場所であると解釈できる。3区に隣接する山（湯ノ崎山）⁹⁾は、調査区を囲むように千曲川に向かって突き出しているため、裾が南北方向に伸びているのは3区の西側となる。ここで問題となるのは、工房と窯の位置関係である。塩崎村史には「窯と工場は宮崎家

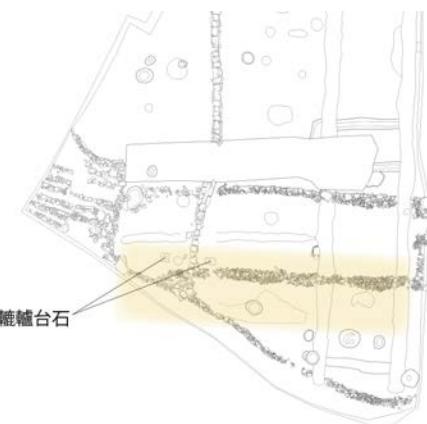
の南側の敷地に築かれ、（中略）、作業場は窯の北側に建てられていたよう」と記載がある。裏を返せば「作業場の南側に窯があった」となるが、先に想定した工房跡の位置の南側は、山の裾が東西方向に伸びているため、山の斜面を利用した東西方向の窯を築くことは困難であると考えられる。村史の記載が誤りなのかは定かでないが、おそらく位置関係としては、東西棟の工房跡が山際に建てられ、それと直列するよう東西方向の窯が西側の斜面に築かれ、その北側に本家である宮崎家があったと考えるほうが自然であると思われる（第7図）。

4 出土遺物の整理と資料調査

出土した遺物の整理を進めたところ、素焼の状



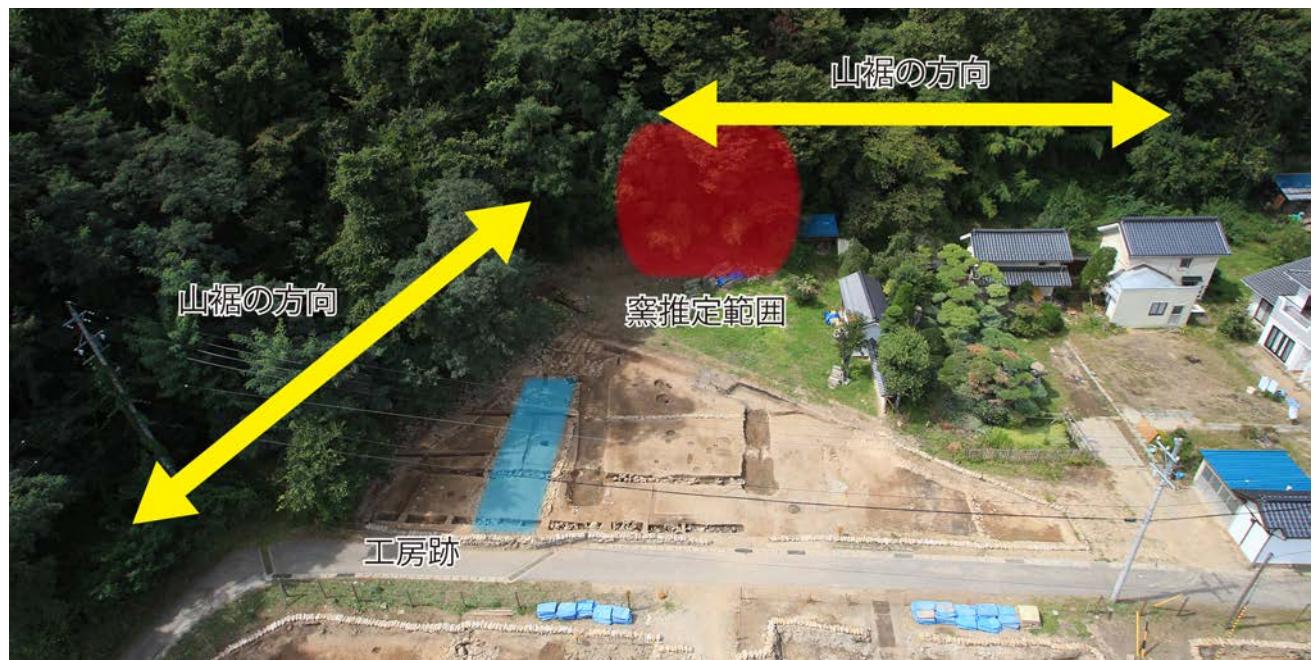
轆轤台石が建物の南壁に沿っていると想定した場合



轆轤台石が建物の北壁に沿っていると想定した場合

第6図 工房跡の想定

平面図縮尺1:400



第7図 工房跡と窯の位置関係（東より）

態の破片と、釉薬がかけられた陶器（本焼）の破片があり、焼成が2度に分けられていたという記録と一致している。なお、出土した遺物量には大きな違いが見られ、圧倒的に本焼の破片が少なく、接合作業を進めて完形になるものはほとんどみられなかった。おそらく、本焼については製品として出荷しているため、窯元にはほとんど残っていなかつたためと考えられる。また、塩崎村史に記載されている器種以外にも、多くの製品を製造していることが判明した。確認できた器種は、甕・鉢類（捏鉢・植木鉢・片口鉢・擂鉢）・壺類（油壺ほか）・徳利・火入・茶入・灯明具・蓋類（急須・灯明・土瓶・土鍋）・羽釜・豆羽釜・七厘などである。甕が主体であったようで、大小様々なものを作っていたようであるが、最大のものは器高が72cmと非常に大きなものである。

出荷していた製品の一端をうかがい知ることができる遺物は数少ないが、確認できる資料には松代焼を彷彿とさせる青緑の釉薬が見事なものもあり、松代焼とのつながりを示すものであると考えられる。なお、出土遺物の中には磁器製品も複数みられるが、長谷で焼成していたのは陶器であったため、磁器製品は工房跡などで家人や職人が使用していた日用品であったとみられる。

窯で使用された道具類は円錐ピン・輪トチ・焼台・匣鉢などである。いずれも、窯内の焼成室で他の製品と癒着しないように製品同士の間に挟み込んだりして使用されるものである。円錐ピンについては大きく分けて小・中・大・特大があり、製品に合わせて使い分けがされていたようである。また、輪トチや焼台についても様々なサイズがあり、こちらも使い分けされていたことが分かっている。

長野市内には、途絶えてしまった松代焼を現在に伝えるために、その製法を再現している窯がいくつかあるが、資料の整理にあたって、松代にある株式会社松代の小澤経弘氏にお話を伺うことができた¹⁰⁾。長谷焼の印象については、「非常に完成された技術である」という率直な意見をいただいた。現代の技術を駆使しても、一度途絶えてし



第8図 松代焼に似た釉薬の製品



第9図 豆羽釜の破片を再利用したテストピース(鉄釉)

また技術を再現・調整することは難しく、松代焼特有の青緑の釉薬の発色が思い通りにいかないこともあるという。長谷で出土した製品に見られる青緑の釉薬の発色は、100%といえるほど完成度が高いものであり、窯の密閉度によって酸素量が変化し、発色が大きく左右される点を考えれば、窯自体の完成度も高かったと考えられるということであった（第8図）。なお、松代焼特有の釉薬は、素地に直接かけただけでは素地の鉄分と反応して発色しないため、下釉をかけたうえで、さらに炭酸銅粉を混ぜた別の釉薬を上釉としてかけるのだという。

「発色」という点では、長谷の職人も釉薬の調整に気を使っていたようで、製品にならなかった素焼きの破片を再利用して、釉薬を複数塗っている破片（テストピース）も出土している（第9図）。松代焼の釉薬ではなく、基本的な鉄釉の発色具合の確認をしていたようであるが、納得のいく配合を追い求めた職人の努力が見え隠れする遺物だと感じる。

5 おわりに

今回の発掘調査の最大の成果としては、埋もれ

ていた地域史を裏付ける近代遺跡の発見につながった、ということであろう。わずか30年余りという短い期間の中で営まれた長谷窯は、地域の生活や産業に貢献した地元の歴史であり、宮崎家の歴史ともいえる。近代遺跡がほかの時代の遺跡と違うところは、より生々しい生活の記録が読み取れ、「個」としての人間活動までも垣間見えるなど、ある種の「親近感」を得やすい点があるのではないだろうか。

長谷を含めた塩崎地区は、今回の工事によって大きく変わりつつある。すでに湯ノ崎山にはトンネルが開通し、千曲市の稻荷山地区が直線的につながっている。時代とともに生活の利便性が向上する一方で、こうした地域史の喪失が危ぶまれるのも事実である。連綿と続いた地域と人の歴史が、長谷の地にもあったことを今回の発掘調査は示しており、近代遺跡の記録調査の必要性と面白さを感じることができるのでないだろうか。

末尾ではあるが、2か年に及ぶ発掘調査では、長谷地域の住民の皆様に多大な御協力をいただいた。特に長谷窯の創業家である宮崎様には、当時の状況に関する聞き取りや蔵の見学、古地図の閲覧など、お忙しい中にも関わらず、様々なご対応していただいた。記して感謝を申し上げる。

註

- 1) 図2の遺跡包蔵範囲、および遺跡年代は、長野市文化財データベースの情報に基づいている。調査及び各報告書では、鶴前（つるまえ）と表記・報告されているが、2017年に旧字名の鶴前（つるさき）にデータベースの表記が改められている。
- 2) 松代焼は、1816（文化13）年に松代藩で行われた殖産興業政策の一つであり、7つの窯が築かれた。藩の窯として始まった松代焼は民窯へと広がるが、昭和初期までにすべての窯が廃業している。その一因は、1872（明治5）年に開業した鉄道網の拡充による安価製品の流通拡大といわれる。
- 3) 唐木田氏の著書には、長谷窯を含めた松代焼系統の窯元に関する写真や図面のほかに、古文書や古記録などの情報も収められている。
- 4) 長谷だけでなく、県内の多くの窯の職人たちは、瀬戸・多治見方面から流入してきたと考えられる。
- 5) 土地の造成を行った際に盛土をおこなったようで、この盛土内に焼物や窯道具の破片が多く混入していた。宮崎家は現在でも「かめ屋」と呼ばれ、往時は「長谷のかめやき」と呼ばれていたようである。
- 6) 『塩崎村史』には、1880（明治13）年6月に作成された

建坪取調簿の間口9間、奥行2間3尺と記載している。一方、唐木田氏の著書では1883（明治16）年の旧役場文書に記載される間口8間3尺（約15.4m）、奥行4間（約7.3m）が紹介されており、寸法が異なる。本稿では、作成年が古い公文書をもとに作成された村史の記載を採用する。間口についてはわずかな差であるが、奥行については倍近く異なる。もしかしたら、工房の増築を行ったのかもしれないが、定かではない。

- 7) 第1表は、塩崎村史の記載と、唐木田氏の著書に記される役場文書の内容を合わせたものである。なお、明治14年の製造数に関しては、両記録（1,031：塩崎村史、1,061：唐木田氏著書掲載文書）に違いがみられるため、併記している。
- 8) この聞き取り記録は、岡田大門窯の創業者である米山直治氏の孫、米山二三男氏の話である。しかし、どのような経緯で手伝いに行ったのかは書かれていらない。
- 9) 調査区の南西に位置している湯ノ崎山は、旧塩崎村と稻荷山村の境でもあった。この山は流紋岩主体の山で、切り出された石は土木工事などに広く利用されたという。宮崎氏の敷地内には、今でも切り出された柱状の石材が残されている。
- 10) 小澤氏は、当センター展示室に来所し、自身の見識を広めるために、焼物の源流ともいえる土器に関して学びたいとおっしゃっていた。その際に、展示してあった長谷の製品についても興味を示され、工場を視察させていただく機会を得た。その際には、出土品（素焼・本焼・窯道具）も実見していただいた。

参考文献

- 安藤裕ほか 1987 『信州の焼き物』
唐木田又三 1993 『信州 松代焼』
小松隆史 2002 「近世信濃の窯業史研究」
『金沢大学考古学 紀要』第26号
佐々木達夫 1980 「加賀・松山窯の発掘」
『考古学ジャーナル』171
佐々木達夫 1981 「加賀・松山窯の第2次調査」
『考古学ジャーナル』186
佐々木達夫 2002 「江戸時代の小型窯跡の系譜を探る」
『金沢大学考古学紀要』第26号
塩崎村史刊行会 1971 『塩崎村史』
塩崎文化財保存会 2017 『語り継ぐ 塩崎の今むかし』
清水昭治 1972 「篠ノ井周辺の陶業—窯跡をたずねて—」
『長野』第45号
菅平研究会 1969 『信濃のやきもの』
仲野泰裕 2013 「信州・善光寺寄進 染付花唐草文大燈籠 の銘文について」『愛知陶磁美術館紀要』18
長野県埋蔵文化財センター 1994 『鶴前遺跡』
長野県埋蔵文化財センター 2018 『年報』34
長野県埋蔵文化財センター 2019 『年報』35
長野市教育委員会 1989 『鶴前遺跡・塩崎城跡』
長野市教育委員会 2013 『真田宝物館だより 六連鏡』
第34号
野村将之 2017 「再興久谷松山窯の窯詰め技法について」
『金沢大学考古学紀要』第38号
古川元三郎 1991 『松代焼』
和田勝彦 2015 『遺跡保護制度と行政』